中村靖子編著『予測と創発――理知と感情の人文学』春風社

2017年、情報学研究科の大平英樹先生を代表とするプロジェクトが、課題設定による先導的人文学・社会科学の研究推進事業の領域開拓プログラムに採択され、私はその中の人文学班のリーダーを務めることになりました。人文学以外には、認知神経科学、複雑系科学、認知科学、データサイエンスの研究者が入り、人文学の中では、ドイツ文学、イギリス史、フランス思想史、美学美術史の研究者による総勢8名の、超学際的プロジェクトです。なんといっても、分野を同じくする人同士が全くいないのです。最初の顔合わせでは、お互い、知らない用語ばかりで困りはしたものの、こんな研究があるんだ！という驚きの連続で、とても楽しかったのを覚えています。その楽しさが、プロジェクトが継続できた秘訣だったように思います。

このプロジェクトは、当初の研究期間の後、継続が認められ、新たに、記号創発ロボティクスを専門とする方をメンバーに加えて、合計5年半続きました。同事業には2021年度から新たに学術知共創プログラムが設けられましたので、我々のプロジェクトの最終年度にあたる2022年、後継プロジェクトとして応募しました。後継プロジェクトとはいえ、今回は私が代表となり、これまでの研究成果を足がかりとしつつ、さらにいろんな分野の方にメンバーに加わっていただいて研究体制を組みました。そして今回も、同じ専門分野の人はいません。そうしたメンバーで5つの研究班を構成し、申請までに何度も各班でミーティングを重ねました。何度も申請書を推敲し、申請を完了するまでのこの期間は、一種の合意形成プロセスのように共通基盤を形成する期間となりました。ヒヤリングに臨むときには、メンバーのみなさんをほとんど盟友のように感じ、とても心強く感じていました。『予測と創発』は、こうしたプロセスのなかで生まれました。大平先生代表のプロジェクト名は、「予測的符号化の原理による心性の創発と共有――認知科学・人文学・情報学の統合的研究」であり、新しいプロジェクト名は、「人間・社会・自然の来歴と未来――「人新世」における人間性の根本を問う」というものです。英文名称はAnthropocenic Actors and Agency in Humanity, Society, and Nature、略してAAAプロジェクトです。人文学が諸科学を先導する、と謳っているとおり、未来設計には、自然科学系の方たちの関与あってこそです。論集の副題に、「理知と感情の人文学」とあるのもそのためです。

この欄では、論集発行に際した苦労話などをご紹介するのが趣旨とのことです。けれども、たしかに発行に至るまでにはいっぱい苦労したと思うのですが、時間が経つと苦労は忘れて、愉しかったことばかり思い出されます。その上で強いて言うならば一番困ったこと、一番焦ったことは、自分自身の原稿がなかなか書けなかったことです。それは、編集作業が大変だったから、というよりはむしろ、自分のなかでまだ十分に熟していないことを、むりやり形にしようとしているからだということが、自分でも分かっていました。他の執筆者の方たちの原稿がどんどん揃っていくなかで、自分の原稿の仕上がりについてはまったく展望が見えない、という状況が続いていたあいだは本当に苦しかったです。そのあいだ、もう論集を編むのはこれきりにしよう！と自分に言い聞かせていました。しかし、それにしても預かった原稿はちゃんと形にしなくてはなりません。せんじつめるに――こんな大げさな言い方をするまでもなく――、執筆者の方々も、みながみなお忙しい中、こうして原稿を寄せて下さるというそのことが、私自身が原稿に向き合うよう、押し続けてくれたのでした。

この本は、ご覧になっていただくと分かるように、文献の挙げ方などは統一していません。分野が多岐にわたるため、それぞれの分野の作法に則るのがよいと思いました。それもまた、専門知の多彩性の現れとしてご寛恕いただければ幸いです。もう一言、述べさせていただくと、規格化や画一化は便利であることを承知しつつも、そうした動きに対し、根強い不信感をもつのは、ドイツ文学を学んできたがゆえでしょう。画一化しきれないところに知のインパクトを感じていただければ、と祈るばかりです。こうした知を湛えた論考を編むことは、知を繋ぐことであり、まさに知の愉しみといえます。